

2022年 新年のご挨拶

謹んで新春のお慶びを申し上げます。1月4日（火）仕事始めとなりました。栗山町は前日から降り続いた積雪で本校も真っ白な世界で、除雪からの始まりとなりました。早朝より公務補の伊藤さんが除雪機をフル稼働させ、生徒や教職員の登校に差し支えないよう頑張ってくださいました。改めて、日頃から本校の教育活動に対し、全ての生徒、教職員の頑張り、保護者や地域住民のご理解とご協力に、心から敬意と感謝を申し上げます。

さて、日本で新型コロナウイルス感染者が確認されてから2年が経過しています。昨年は第4波、第5波に見舞われ、多くの学校で感染者が確認され、その対応で大変苦慮されていました。幸い本校での感染者は発生しませんでした。これも生徒や教職員の感染防止対策の徹底、保護者のご協力があったからこそだと思います。現在オミクロン株が急速に拡大することが懸念され、世界各地で大規模な対応が実施されており、国内でも東京や沖縄が100名を超える罹患者が発生しています。（1月4日現在）どこまで新型コロナの感染防止の期間が延びるかは予想できませんが、人類からこのウィルスが一日も早くなくなり、普段の生活に戻れることを心から祈念致します。

お正月なので、今年の干支である寅年のことを調べてみました。「寅」という字は「演」から来ていると言われてます。このような「人の前に立つ」ことや「延ばす」という意味から、「寅年」は芽を出したものが「成長していく（見えてくる）」年や、これから成長する物事の「象徴が生まれる（始まる）」年と言われてます。加えて、「寅」は動くの意味で、「新しく動き始めた段階」という意味があります。これらを合わせ考えると2022年は厳しい冬を超えて、新しく立ち上がることを向けて動き出す段階に入る1年になるというイメージがあります。

改めて、世界的な新型コロナウイルス感染症の収束と、安心安全な生活の保障がされる社会状況になることを干支が示す力を借りて願うばかりです。

各自が毎日、感染防止に向け行動する緊張した生活を送っておりますが、年末年始は、身体や心を休める大切さを感じました。家族や友人知人と過ごす時間は、学ぶことや働くことの原動力になっていることを実感し、国が推進している働き方改革の根幹を見据え、日々の生活を見直していくことも必要であると思います。

人が人として輝いていくために、人の為に尽くしてゆくことを願い、今年一年もよろしくお願い申し上げます。

全道校長会後期研究協議会

1月11日（火）に、ホテルライフポート札幌において、全道校長会後期研究協議会が開催される予定でしたが、新型コロナウイルス感染症（オミクロン株）を含む全国的な感染拡大で、急遽 Zoom での開催となりました。数年ぶりに全道各地で頑張っている校長先生との対面を楽しみにしていましたが、非常に残念でした。

開会式の冒頭、札幌南高等学校の廣田会長が、コロナ禍で各学校で生徒の安全に配慮しながら、学校教育活動をどうしたら実施できるのかを考え、様々な工夫した取り組みおこなって、生徒のために学校経営を推進している全ての校長先生に感謝申し上げますと、ご挨拶されました。また、昨年10月から北海道教育委員会の教育委員になられた元札幌北高等学校校長（校長協会会長）の大鐘秀峰様からご来賓のご挨拶をいただき開会しました。

北海道高等学校教育研究大会

第59回北海道高等学校教育研究大会が、「北海道の新たな時代を拓く高等学校教育の創造」の研究主題のもと、1月12日（水）全体会が Zoom で開催されました。今回は、能楽師の安田 登氏が「未来へつなげるリベラルアーツ-Society5.0時代の古典の価値」と言う演題のなか、琵琶演奏を交えた興味深い講演となりました。

また、13日（木）は教科別集会として、私は札幌東豊高等学校で開催された保健体育部会に Zoom で参加させていただきました。

北海道高等学校教育相談研究大会

北海道高等学校教育相談研究会の第50回記念大会が、1月14日（金）、ホテルライフポート札幌において、運営者以外は Zoom での開催となりました。

研究主題「変化の激しい多様性の時代をしなやかに生きる力を育む教育相談を目指して」、北海道の高等学校における教育相談活動の発展に寄与することを目的とし、開催されました。

記念講演では、医療法人こころとそだちのクリニックむすびめ院長の田中 康雄氏、また基調講演では、東京大学理事の今泉 柔剛氏、シンポジウムでは、「これからの学校教育相談に期待すること～連携・共働の在り方～」として今泉先生に加え、次の方々にご対応いただきました。

○知内町教育委員会 教育長 本間茂裕氏

○北海道教育大学札幌校 准教授 益子洋人氏

○札幌市教育委員会 スクールソーシャルワーカー 高野和美氏

そして、開善塾教育研究所 所長の藤崎育子氏にコーディネーターとして、今後の方向性を示していただきました。

50周年記念と言うこともあり、全国各地で講演されている方々が一堂に会し、大変素晴らしい研究大会でした。

大学入試改革を考える

令和3年度大学入試で初めての共通テストが実施され、問題の傾向や内容の分析が進み、思考力・判断力・表現力等まで問える問題となっているか検証が進んでいます。令和3年7月に、「大学入試の在り方に関する検討会議提言」がまとめられ、共通テストへの「英語民間試験」や「記述式」の導入が断念されるとともに、今後の大学入試の改善に係る実施・検討の方向性が示されました。また、同じく3月には、令和7年度から実施される新学習指導要領に対応した共通テストの出題 教科・科目が大学入試センターから発表されました。新学習指導要領の新科目である歴史総合や日本史探究・世界史探究、公共や情報Ⅰなどについて、大学入試センターや受験生の負担に配慮し、科目数は減らされたが、まだ授業実践のない新科目の組合せ設定や情報科科目の出題内容・方法について不安が残ります。また、「大学入学者選抜における多面的な評価の在り方に関する協力者会議審議のまとめ」では、調査書における観点別学習状況の評価の取扱いや電子化の在り方について、調査書の内容が確定することで教員負担は減ったが、大学の利用方法に課題は残っています。以上のように、令和4年度大学入学者選抜実施要項が確定したとはいえ、未だ不確定要素が多く、これまでの懸念も払拭されていないことから、関係機関との調整を図ることは勿論、今後も動向を注視していく必要性があります。